

静岡県磐田原台地における石器ブロックの重複形成

富 樫 孝 志

要旨 静岡県磐田原台地における旧石器時代の石器群は、同時期の遺構分布範囲を示す「エリア」という概念によって整理、理解されてきた。これには、同一ブロックは一時期の石器群と言う前提があるが、その前提のもとでは、ブロック間の時期的関係に矛盾が生じる例が複数発生するため、同一ブロック内とは言え、時期の異なる石器群の混在を想定し、瀬戸内系石器群と縦長剥片系石器群の出土状況を検討したところ、両石器群のブロックは、時期を違えて同一地点で重複して形成されたと解釈する方が合理的であることを指摘した。これは当地で旧石器時代遺跡を理解する基盤であった「エリア」の概念に再検討を迫るものである。

1. はじめに

静岡県磐田原台地は、県西部にある細長い三角形の台地で、南北約 12km、東西は最も広い南端で約 4.5km である。台地の西側縁辺には、旧石器時代の遺跡が集中して分布しており、現在のところ 79 箇所（日本旧石器学会 2010）の旧石器時代遺跡が登録されている。遺跡の分布や概要は、すでに紹介されているため省略する（山崎・進藤 1993；池谷・富樫・麻柄 2010）。

磐田原台地における旧石器時代遺跡の調査は、寺谷遺跡の調査（平安博物館 1980）で、調査区内に二つの集落が並存していた状況が復元されたことから本格的になる。これ以降、磐田原台地での旧石器時代遺跡の調査は、集落の復元に主眼を置くようになる。それは広野北遺跡の報告（平安博物館 1985）にも引き継がれ、勾坂中遺跡の調査（磐田市教育委員会 1994、1996）では、地層の堆積が良くないため、文化層を分層できない当地で、文化層に代わる概念として「エリア」が提唱された。筆者が、当地で高見丘Ⅲ・Ⅳ遺跡を調査した際も、25,000 m²に及ぶ調査区内を複数のエリアに区分することで、出土遺物の整理的な理解を図った（静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998）。

旧石器時代の遺物は、黒色帯と呼ばれる暗褐色の層とその上に堆積する黄褐色の層の二層、厚さ 40～50cm の範囲から出土することが多い。このような状況であるから、磐田原台地では時期の異なる石器群が同一面で出土するのが通常であるが、ブロックや礫群と言った遺物のまとまりは認識できるため、遺物群を時期ごとに区別する方法が求められる。勾坂中遺跡で提唱された「エリア」は、遺物群を時期ごとに区別して、同時期の遺物が分布する範囲を設定し、これを文化層に代わる単位とするもので、磐田原台地における旧石器時代遺跡の調査に確実な進展をもたらした。

エリアの設定には、一つのブロックは一時期と言う前提があるが、時期の異なる石器群が同一平面で出土する当地で、一つのブロックが一時期に収まるのかと言う疑問は、今も未解決である。

本稿では、磐田原台地におけるブロックの一括性を再検討し、同一地点における複数ブロックの重複形成の可能性を探る。そして、エリアの再考と石器群の再編成を促すことを目的とする。

2. エリアの設定

勾坂中遺跡は、1989 年～ 1993 年に約 80,000 m²という広大な範囲が調査された。そして、ブロック 157 基（うち 6 基は細石器文化期）、礫群 290 基、配石 488 基が出土したが、遺物包含層の厚さは約 40cm で、出土レベルによる時期区分は、現地調査時から不可能と判断され、整理作業での接合作業や個体別資料分布、共有関係の検討でもこのことが追認された。

そこで、出土層ごとに時期を分けた後に各種検討に入ると言う通常的手段とは逆に、まず、個体別資料の分類を行い、次にブロックを認定し、ブロックで出土した石器からブロックの所属時期を決め、ブロック間接合と個体別資料の共有関係をもとに同一時期のブロックが分布する範囲を決め、広大な調査区内を、同一時期の遺構が分布する範囲で区切っていくという手段が提案された。

このような手段は、同一地点で時期の異なる石器群が重複しない限り、分布範囲の違いは時期の違いと遺物群の単位を示していると考えられたため、出土層による時期区分は不可能でも、分布上の単位を抽出することで時期区分が可能であるとの見通しで行われた。この方法は出土層による機械的な時期区分ではないため、下記の資料操作が行われた。

- ①縄文時代の石器を除外する。
- ②細石器とその同一個体資料を抽出し、これらを細石器文化の所属とする。
- ③残った石器を個体別に分類するとともに、出土状況からブロックを設定する。
- ④石器の形態、型式上の特徴から、各ブロックの時期を決める。
- ⑤ブロック間の接合関係や個体別資料の分布範囲、時期別ブロックの分布範囲から、同一時期の石器群が分布する範囲を決める。
- ⑥上記の範囲に含まれる礫群や配石は、同範囲内のブロックと同時期と解釈する。

こうして同一時期の資料群が分布する範囲としてエリアが設定され、このエリアが、当地における文化層に代わる概念として提唱された。エリアの提唱は、寺谷遺跡と広野北遺跡を通じて行われてきた集落の復元に、一つの間概念を設けたことになる。

地層の堆積条件の良い地域でも、文化層をまたがる資料が認められることがあるように、勾坂中遺跡でもエリアをまたぐ資料は散見された。当然ながら、エリア同士の境界付近には両エリアの資料が混在するグレーゾーンと言える範囲が存在するが、エリア区分は、グレーゾーンの存在を想定しながらも、一本の線で区切ることにしているため、エリアをまたがって分布する個体別資料の所属エリアは、下記の原則の下に決定された。

- ①資料数が多い方のエリアを本来の所属エリアとする。
- ②資料数が等しい場合は、石核を含む方のエリアに所属させる。
- ③資料数が等しい場合、石器の型式学的特徴が合致するエリアの方に所属させる場合もある。
- ④以上の三条件に合わない場合は、全体の状況から所属エリアを判断する。
- ⑤ブロック内出土であっても、時期が異なると判断される石器は除外する。

このように、エリアの設定には多くの前提条件と約束事があるため、意図的とも思える資料操作もやむを得ないが、出土層によって資料群を分離できない以上、遺跡全体と個別遺構という、大小両極端の資料単位の間に中間の単位を設けなければ、遺構外出土資料を集計、検討の対象に加えることができず、ましてや調査当初の目的であった集落の抽出は不可能である。

このようにして設定されたエリアは、地層の堆積状況の良くない地域で、文化層に代わる有効な概念と思われるが、同一地点で時期の異なるブロックが重複しない限り、同一ブロックの資料は一時期として扱う前提がある。勾坂中遺跡の報告書では、同一地点で時期の異なるブロックが重複する事例は少数であったと記載されていることから、このような前提を設けたと思われる。

しかし、同じ報告書でブロック外では尖頭器と角錐状石器が同一エリアで出土している例や、旧石器時代の石器と縄文時代の石器が同一エリアで出土している例が報告されているにもかかわらず、ブロックだけは同一時期の資料と考えるのは、ブロック外出土資料もブロック内出土資料と同等に評価するためにエリアと言う概念を導入したという報告者の意図と合っていない。

ブロック外出土資料で、時期の異なる石器の重複が見られる以上、ブロックでも時期の異なる石器が重複している可能性は想定できる。その場合は、ブロック内資料が一時期になるよう資料操作されたと思われるが、改めて現代的な視点で、再検討が必要である。

本稿には、膨大な資料に多大な労苦を払って編み出されたエリアを否定する意図はない。筆者もエリアに基づいて石器群を理解してきた一人である。しかし、エリアが提唱されて 15 年、ブロックや接合資料、個別別資料の共有関係に対する理解は変わってきている。ごく小規模のブロック以外のブロックは、特定場所への回帰行動が累積して形成されたことが明らかにされ（野口 1995；富樫 2008）、今やその累積の単位を抽出して、行動論を展開させる方向に研究が進みつつある。

このような視点から考えると、エリア設定の前提となっている一ブロック＝一時期と言う考え方は再検討を要する。とは言え、いきなり累積の単位を抽出することはできない。その前に検討すべきことは、時期の異なるブロックが同一場所で重複して形成されている可能性である。幸いなことに磐田原台地では、今のところ細石器出現以前の石器群は、大きく二時期に分けられる。すなわち、瀬戸内系石器群とその後に出現したとされる縦長剥片系石器群である。広野北遺跡では、縦長剥片系石器群が、二層に分けられると報告されているが、これは後述するが、別途検討の余地がある。

したがって、現状では各遺跡で瀬戸内系石器群と縦長剥片剥離系石器群の出土状況を検討することになる。ここで言う瀬戸内系石器群とは、瀬戸内概念（高橋 2001）による剥片剥離技術とそれによって剥離された剥片を加工した石器、あるいは角錐状石器を含む石器群のことである。また、縦長剥片系石器群とは、縦長剥片剥離技術を技術基盤とする石器群である。これらの石器がブロック内から出土している事例で、瀬戸内系石器群を抽出したうえで、共伴している石器を検討し、さらに接合関係と個別別資料の共有関係を持っているブロックの内容を検討し、瀬戸内系石器群が純粋なブロックを形成しているかどうかを検討する。

3. 瀬戸内系石器群の出土状況

磐田原台地で瀬戸内系石器群が出土している遺跡は、広野北遺跡、勾坂中遺跡、広野遺跡（豊田町教育委員会 1996）、勾坂上 2 遺跡（磐田市教育委員会 1997）、長者屋敷北遺跡（磐田市教育委員会 2009）がある。勾坂上 2 遺跡の資料はブロック外の単独出土である。他に京見塚遺跡でも出土しているが、2011 年 12 月現在未報告である。また、筆者が調査、報告した高見丘Ⅲ・Ⅳ遺跡でも角錐状石器を報告しているが、これもブロック外の単独出土である。

ここでは、最初に勾坂中遺跡エリア S4 での瀬戸内系石器群の出土状況を検討した後に、勾坂中遺跡における他のエリアでの瀬戸内系石器群の出土状況を検討し、さらに、広野北遺跡、広野遺跡、長者屋敷北遺跡での出土状況を検討する。

（1）勾坂中遺跡エリア S4

このエリアでは、丘陵状の尾根に沿ってブロックが並ぶように検出されている（図 1）。これらのうち、ブロック B15 とブロック B12 ではブロック間接合が認められ、ブロック B12 とブロック B51 では、オパール質の特徴的な個体の石材を共有している。特徴的な石材である上に、ブロック B12 で 10 点、ブロック B51 で 32 点と言う点数を保有しているため、確実に個体を共有していると言って良い。このような関係から、ブロック B15、B12、B51 は同時期と言う解釈になるが、その解釈の妥当性を出土遺物から再検討する。

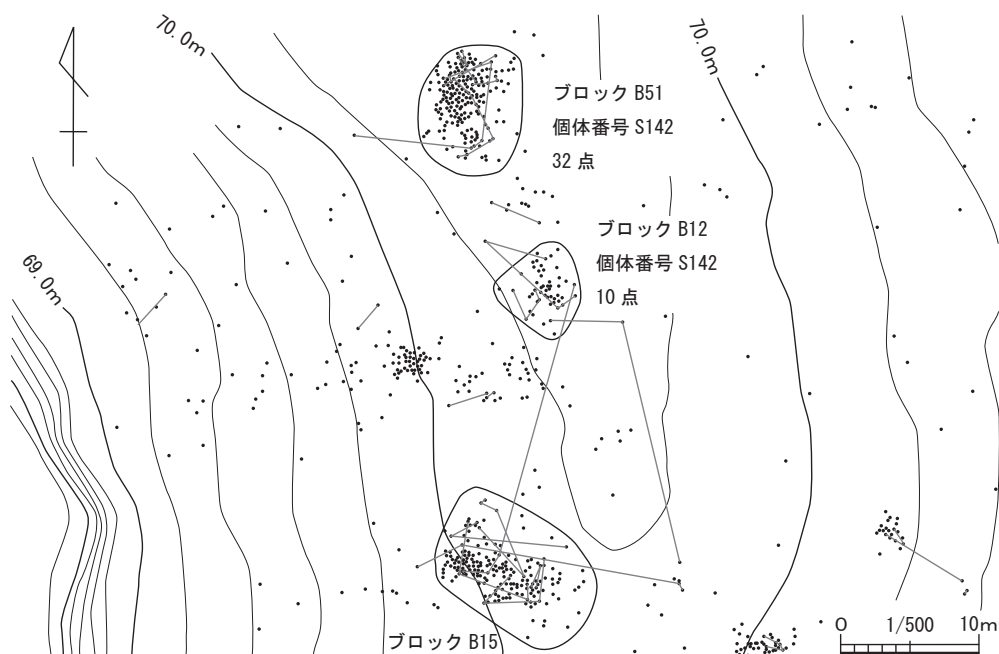


図 1 勾坂中遺跡エリア S4 の石器出土状況

ブロック B15 で瀬戸内系石器群に属する石器は、図 2-1～7 で、これらは同一個体である。1 と 2 は角錐状石器として報告されていて、共に横長剥片を使っている。2 は先端と末端を欠損しているが、1 と同様に末端に未加工部分を残していたと思われる。3～7 は不定形剥片で、これらはすべて接合し、打面と作業面を入れ替える剥片剥離が行われたことを示している。また、自然面を残す剥片があることから、原石か原石に近い状態の石核が搬入されたことを示している。

同じブロックでは、図 2-8～11 に示した石器も出土している。8 は縦長剥片を使用したナイフ形石器、9、10 は微細な剥離のある縦長剥片、11 は縦長剥片石核である。これらは接合しないが、同一個体であることから、ブロック内で縦長剥片が剥離されたことを示している。

ここで一つの検討事項が浮上する。個体別資料 S111 は角錐状石器と不定形剥片剥離技術を含む資料で、瀬戸内系石器群と考えて良いが、個体別資料 S112 は縦長剥片剥離系石器群で、両石器群が、同一ブロック出土とは言え、これらを同時期と考えて良いかどうかである。

南関東の出土例を参考にすれば、S111 は武蔵野ローム層の V 層～IV 層下部、S112 は VI 層か IV 層中部～上部で出土する石器群であり、通常は同時期とは考えないであろう。

この問題をさらに追及するために、周辺のブロックとの関係を検討する。ブロック B15 はブロック B12 と接合関係にあるため、ブロック B12 出土の石器を図 3-1～4 に示す。これらは同一個体ですべて接合する。このことから、ブロック B12 では縦長剥片が剥離されたことがわかる。

ブロック B12 は、先述のようにブロック B51 とオパール質の特徴的な個体を共有している。そこで、ブロック B51 で出土した石器を図 3-5～11 に示す。一見してわかるように、縦長剥片剥離系石器群で、南関東では、武蔵野ローム層の VI 層か IV 層中部～上部で出土する石器群である。したがって、ブロック B12 と B51 が同時期と考えることに問題はない。

しかし、ブロック B12 と B15 に接合関係があることを根拠に、両ブロックを同時期と考えると、ブロック B15 と B51 も同時期になり、瀬戸内系石器群と縦長剥片剥離系石器群が同時期と言うことになる。南関東で言えば、武蔵野ローム層の V 層～IV 層下部で出土する石器群と VI 層もしくは、IV 層中部～上部で出土する石器群が、磐田原台地では同時期に存在したことになる。

この矛盾は、ブロック B15 の資料を同時期と考えたところに原因がある。ブロック B15 で出土した瀬戸内系石器群と縦長剥片系石器群は、それぞれ別の時期と考えなければならない。同一ブロックから出土した資料を同時期と考えるのではなく、同一ブロックとは言え、時期の異なる石器群が混在している。さらに言えば、同一地点に時期の異なるブロックが重複して形成されていると考えた方が良い。このような事態が、必ずしもすべてのブロックに当てはまる訳ではないが、同一地点でのブロックの重複形成と言う観点は、これまでになかったことで、このような新しい視点で各ブロックの内容を再検討することは、磐田原台地を越えて地層の堆積状況の良いない地域における資料単位の抽出に再考を促すことになる。

そこで、磐田原台地で瀬戸内系石器群が出土したブロックについて、ブロックの重複形成と言う観点から、さらに検討する。

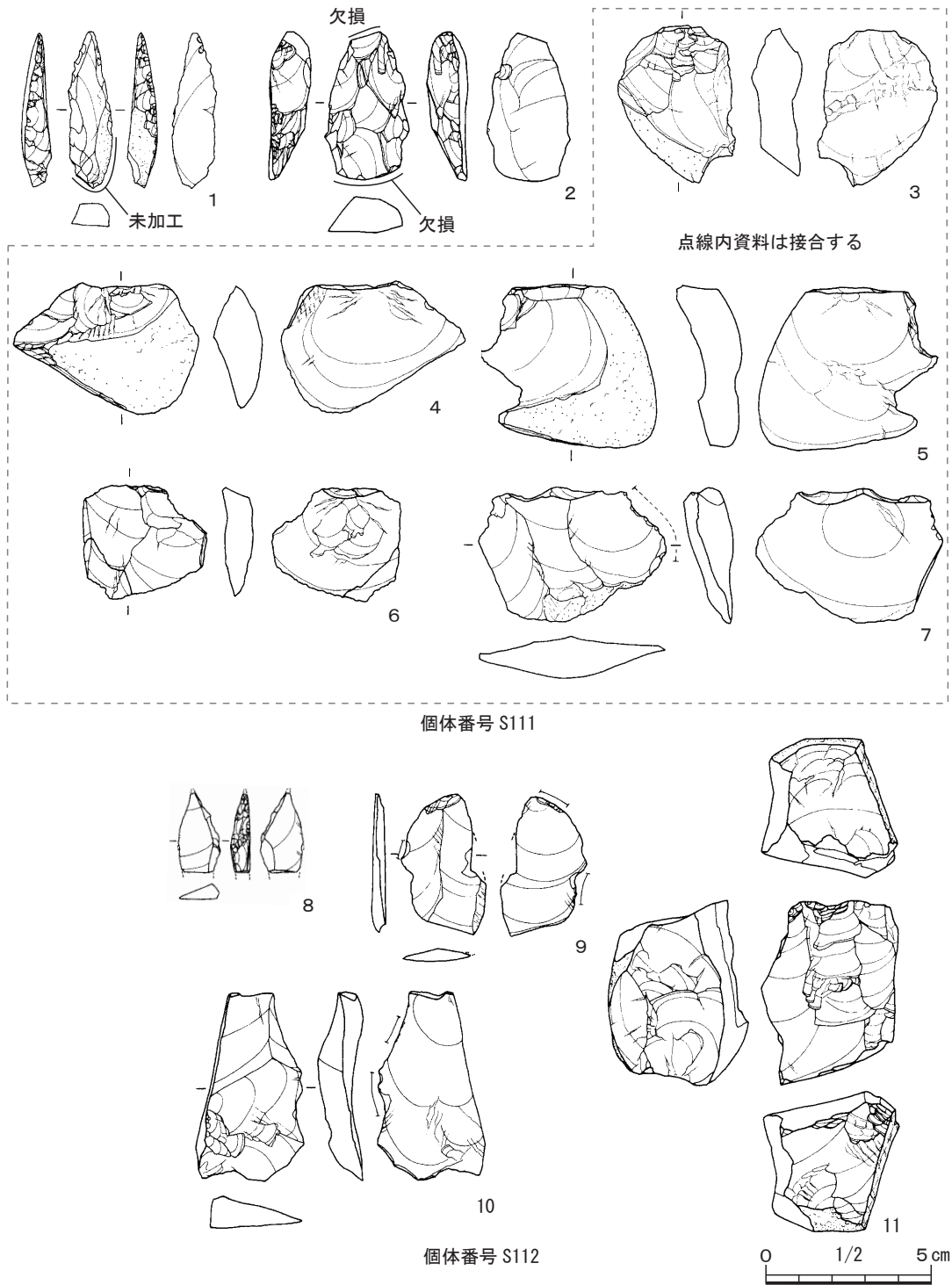
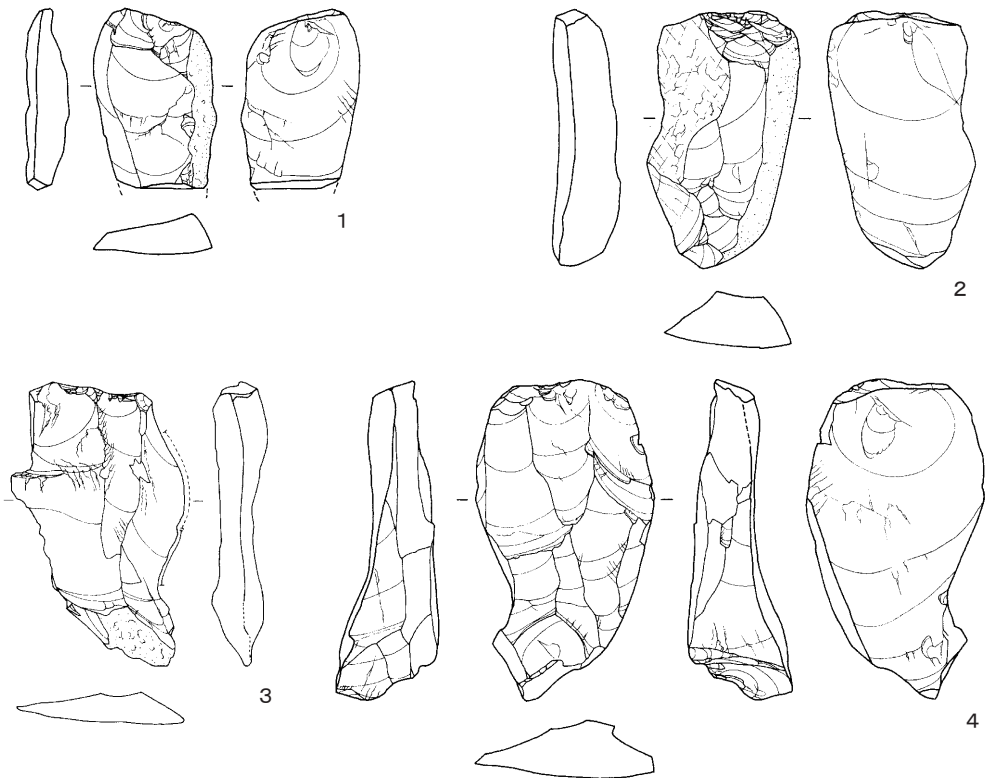
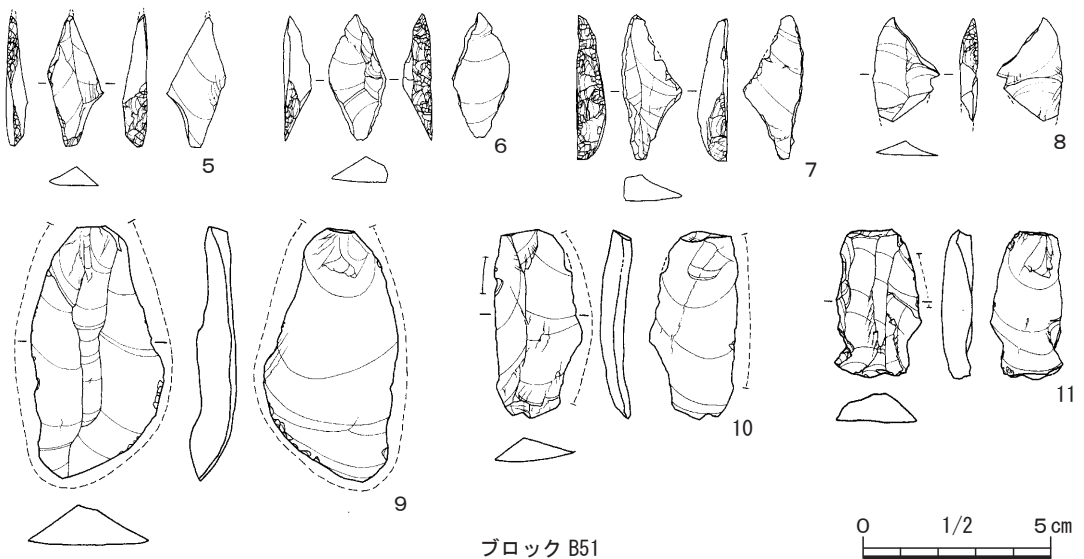


図2 旬坂中遺跡エリア S4 ブロック B15 出土石器

静岡県磐田原台地におけるブロックの重複形成



ブロック B12、個体番号 S137, すべて接合する



ブロック B51

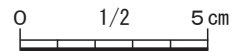


図3 勾坂中遺跡エリア S4 ブロック B12, B51 出土石器

(2) 勾坂中遺跡エリア E 4

このエリアでは、図 4 に示したブロック C81 と C82 から角錐状石器と横長剥片石核を含む石器群が出土している。

図 4-1 と 3 は同一個体で、共に横長剥片の縁辺に刃潰し加工をした石器である。両方とも先行剥離面に、主剥離面と同じ方向からの剥離が見られることから、横長剥片を同一打面から連続剥離する石核から剥離されたと考えられる。両者は角錐状石器として報告されているが、厚みがない点と、縁辺の加工が、角錐状石器によく見られる大型の剥離面が連続する鋸歯状の加工ではなく、ナイフ形石器と同様の刃潰し加工である点で、通常の角錐状石器とは異なる。

2 と 5 は、これらも同一個体の石核である。2 は剥片を素材にして、2 枚の剥離面で山形になった打面から横長剥片を剥離している点で瀬戸内概念に合う石核である。5 は板状の剥片を素材にした石核で、2 と同様に 2 枚の剥離面で山形になった打面から横長剥片を剥離している。これも板状の剥片を素材にしていることと、山形になった打面から横長剥片を剥離している点で、瀬戸内概念に合う石核である。

上記のようにブロック C81 と C82 では、角錐状石器と瀬戸内概念による石核を含んだ瀬戸内系石器群が出土しているが、C82 では図 4-4 に示した縦長剥片が出土している。この縦長剥片は、先行剥離面にも縦長剥片の剥離面が見られることから、縦長剥片を連続剥離する石核から剥離されたと考えられ、これが正しいなら、縦長剥片系石器群の所産になる。これは、このブロック内では単独個体であるため、ブロック形成時かその後に持ち込まれたと考えるのが妥当である。

ブロック C81 と C82 と同じエリアでは、ブロック C1 と C2 も検出されている。これらのブロックで出土した石器を図 4-6 ～ 10 に示す。6 は縦長剥片を使っているように見えるが、別のブロックで出土した不定形剥片石核に接合することから、不定形剥片を使っていることになる。7 は縦長剥片を使ったナイフ形石器である。8 は縦長剥片石核の調整剥片である。9 は不定形剥片を使ったナイフ形石器、10 は微細な剥離のある縦長剥片である。

このようにブロック C1 と C2 では、不定形剥片を使った石器と縦長剥片を使った石器が出土している。縦長剥片系石器群と不定形剥片を使った石器群が伴うのは通常のことであるから、ブロック C1 と C2 は縦長剥片系石器群から構成されていると考えて良い。

エリアは、同時期の遺構が分布する範囲と定義されているため、上記のブロック C81、C82、C1、C2 はいずれも同時期と言うことになり、したがって、瀬戸内系石器群と縦長剥片系石器群が同時期と言う解釈になる。しかし、現在の編年観では、両者を同時期と考えることはできない。この矛盾の原因は、一ブロックの石器群を一時期、そして、同一エリア内のブロックを同時期と考えたところにある。ブロック C81、C82 とブロック C1、C2 の間に接合、個体の共有ともないことから、ブロック C81、C82 とブロック C1、C2 は別の時期と考えて良く、別エリアに分けた方が良い。また、ブロック C82 に縦長剥片が搬入されていることから、このブロックでは、時期の異なる石器の混入も考えなければならない。

静岡県磐田原台地におけるブロックの重複形成

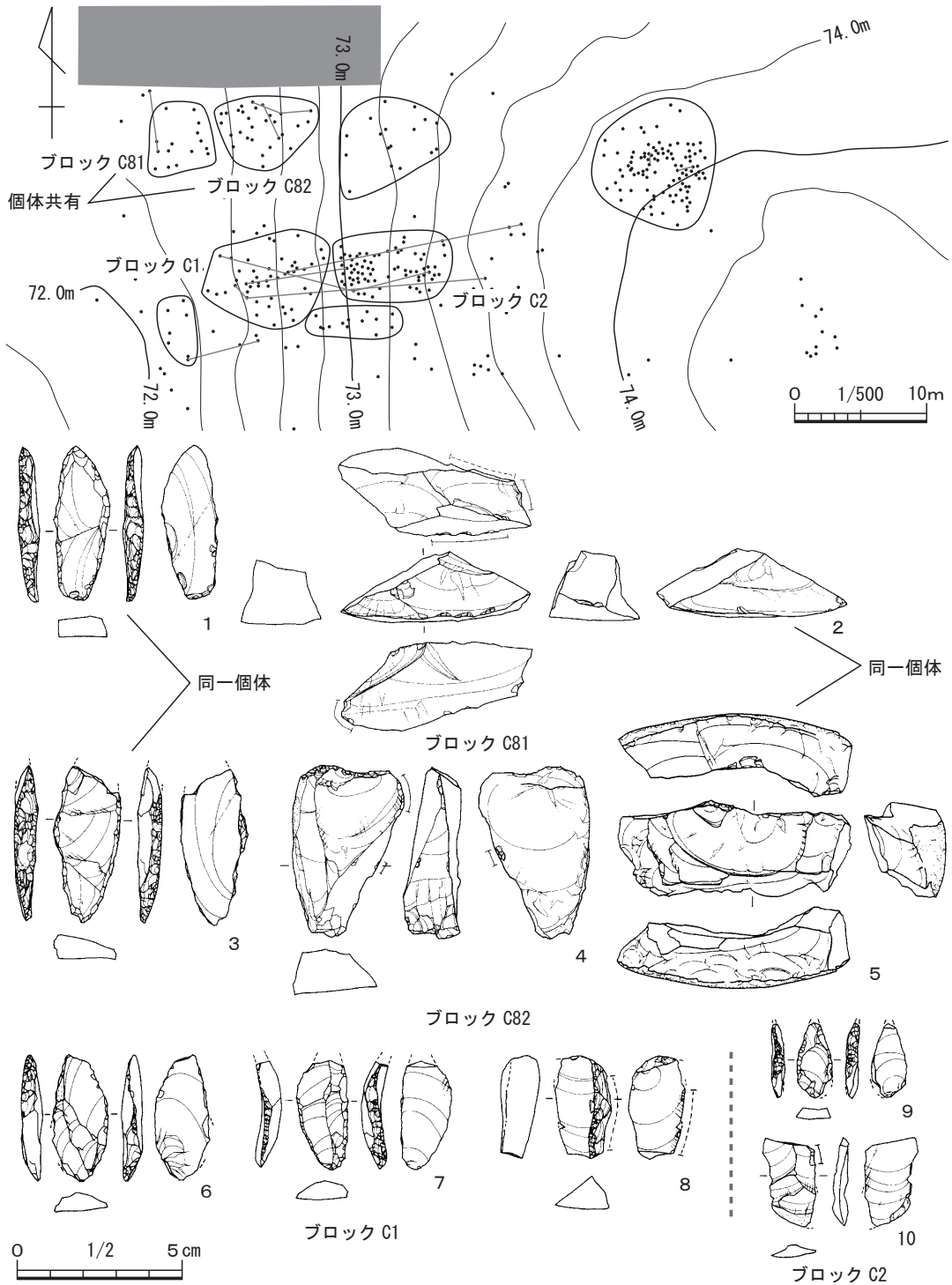


図4 匂坂中遺跡エリア E4 の石器出土状況と出土石器

(3) 勾坂中遺跡エリア N2 ブロック A21

このブロックで出土した資料を図5に示す。1～6は横長剥片剥離に関する資料で、すべて同一個体である。そして、1～3が接合し、4～6も接合する。3と6は横長剥片石核で、剥片を素材として、山形に調整した打面から横長剥片を剥離している点で、瀬戸内概念に合う資料である。

7～12は縦長剥片に関する資料である。7と9は縦長剥片を使ったナイフ形石器で、8は縦長剥片である。12は縦長剥片石核で、9のナイフ形石器、10と11の剥片が12の石核に接合し、ブロック内で縦長剥片が剥離されたことを示している。

このように、このブロックでは瀬戸内系石器群と縦長剥片系石器群が出土している。

(4) 広野北遺跡

広野北遺跡では、「ナイフ形石器文化 (K2)」と「ナイフ形石器文化 (K3)」と言った二枚の文化層が上下に分かれて出土したとされているが、両方の文化層で瀬戸内系の石器が出土している。下位のナイフ形石器文化 (K3) では、翼状剥片石核が出土しているが、ブロック外出土のため、他の石器群との関連は検討できない。ここではナイフ形石器文化 (K2) で報告された資料を検討する。

ナイフ形石器文化 (K2) では23箇所のブロックが報告されており、ブロック3で瀬戸内系石器群が出土している。他のブロックでは縦長剥片系石器群が主体で、尖頭器を含むブロックもある。これについては、ナイフ形石器文化 (K2) を、瀬戸内系石器群を含むブロック群、縦長剥片系石器群に尖頭器が加わるブロック群、尖頭器が主体になるブロック群に分類して、三時期に分けている。つまり、ナイフ形石器文化 (K2) は一つの文化層でありながら、複数の時期にまたがっている。

ブロック3とその出土資料を図6に示す。ブロック3は調査区の端で検出されたブロックで、隣接するブロック2と個体を共有しているだけで、他のブロックとは接合関係、個体別資料の共有とにもない。瀬戸内系石器に含まれるのは1～4である。1～3は頁岩の同一個体として報告されている。ここで言う頁岩は、現在ではシルト岩と言う石材名で統一されている。1は先行剥離面に盤状石核の打点が残っていることから、盤状石核から最初に剥離された横長剥片を使ったナイフ形石器である。2は二番目以降に剥離された横長剥片を使ったナイフ形石器である。3と4は、剥片素材の石核で、側面の一部が山形になるように打面調整をして、山形になった部分に打撃を加えて横長剥片を剥離した石核で、瀬戸内概念に合う石核である。

同じブロックからは5～8に示す石器も出土している。5と6は、1～4とは個体が異なるが、横長剥片を使ったナイフ形石器である。7と8は、1～6とは異なる個体の縦長剥片を使った石器である。7は縦長剥片の末端を斜めに切断したもので、先行剥離面には、縦長剥片を連続剥離した痕跡が見られることから、縦長剥片剥離技術が存在したことを示している。さらに図示はしていないが、縦長剥片石核を含む接合資料も報告されていることから、このブロックには縦長剥片系石器群も存在したことを示している。

以上のことからブロック3では、瀬戸内系石器群と縦長剥片系石器群という時期の異なる石器群が混在していることになり、時期の異なるブロックが同一地点で重複している可能性を示している。

静岡県磐田原台地におけるブロックの重複形成

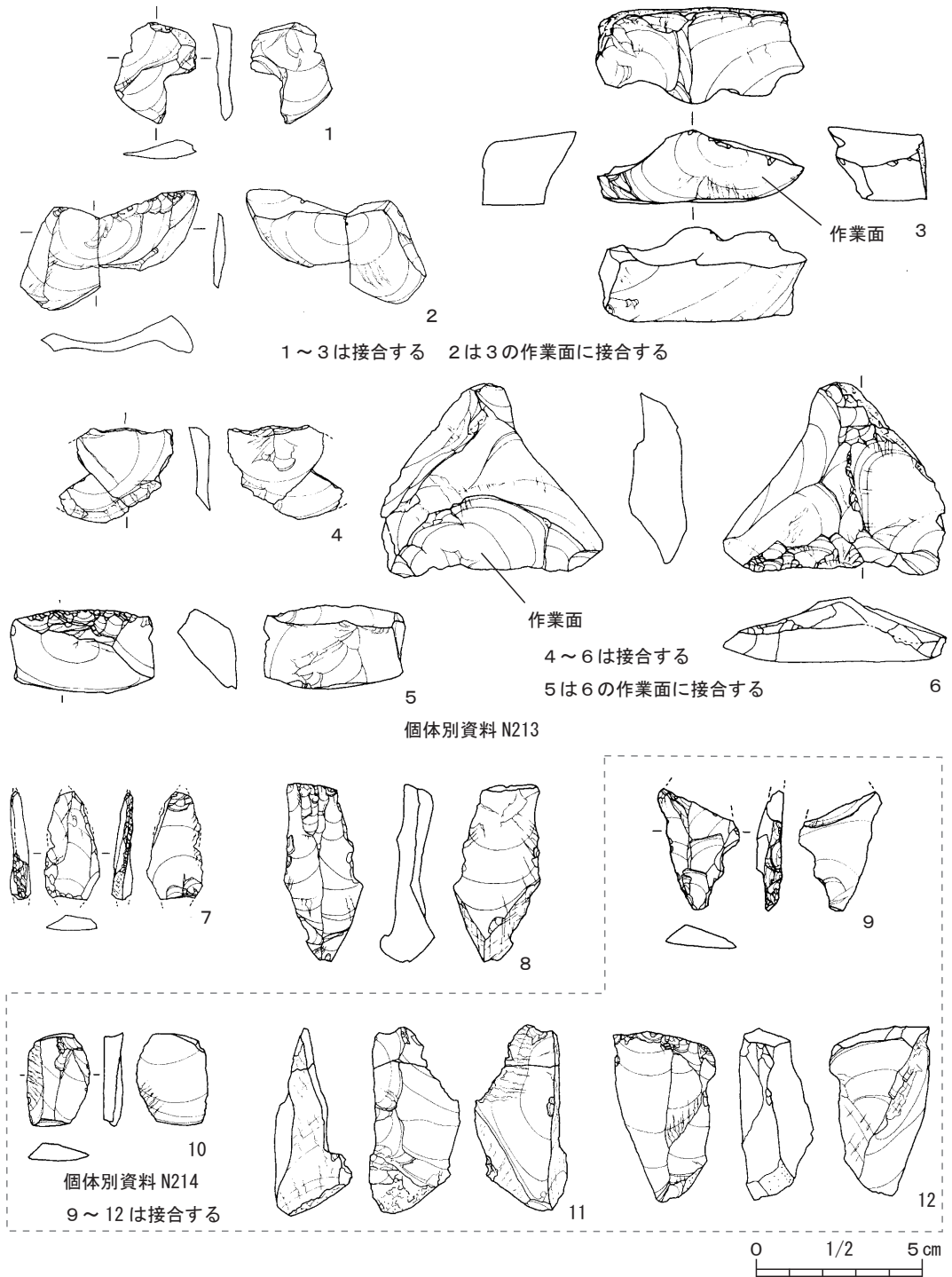


図5 匂坂中遺跡エリア N2 ブロック A21 出土石器

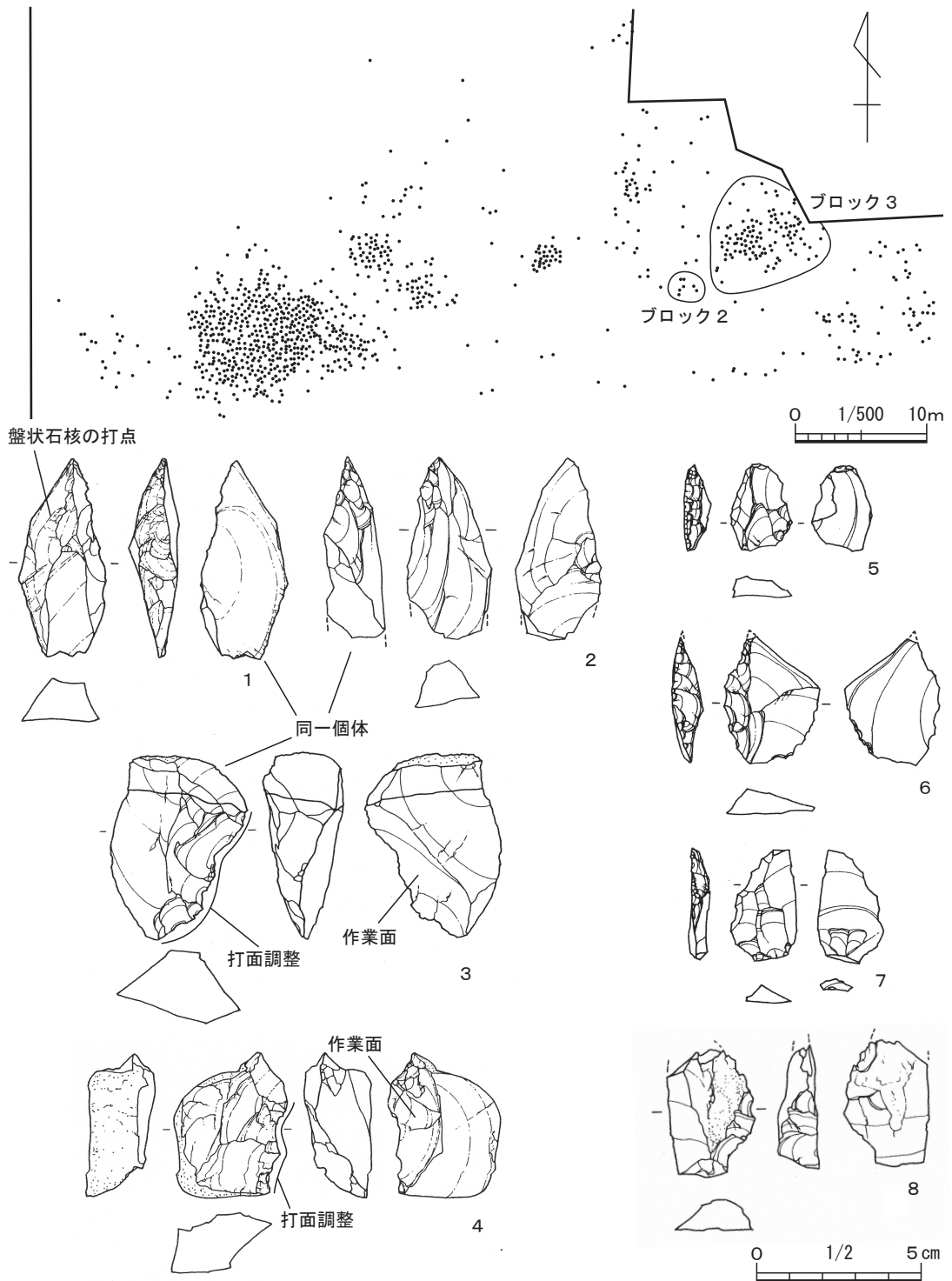


図6 広野北遺跡ナイフ形石器文化 (K2) ブロック3出土石器

(5) 広野遺跡

広野遺跡は広野北遺跡の南側に隣接する遺跡で、住宅建設に伴う調査のため、調査範囲は狭いが、図7に示したように、一つのブロックを掘り当てていると思われるため、遺物の密度は高く、後述するように石器の内容も充実している。

1はシルト岩の横長剥片を使ったナイフ形石器で、国府型に類似する石器である。二側縁加工ではあるが、左側縁に見られる加工は、剥片の縁辺に微細な加工を入れた程度で、実質は一側縁加工である。2～4はシルト岩製の縦長剥片を使った二側縁加工のナイフ形石器である。

5は安山岩の剥片で、自然面打面が残っている。7は安山岩製の横長剥片石核で、片側全面に自然面を残した分厚い剥片を使っており、打面を山形に整えてはいないが、自然面を打面にして横長剥片を剥離している。そして、横長剥片剥離後に、打面を移動させて不定形剥片を剥離している。

5と7は、地元では採集できない黒色の安山岩を使っており、接合しないが、5は自然面打面を残しており、7は自然面を打面にした作業面があることも考え合わせると、両者が同一個体であることは間違いない。石材は、報告書では「サヌカイト」としてあり、産地は示されていないが、西日本からの搬入を想定しているようである。筆者が実見したところでは、岐阜県の下呂市で採集できる通称「下呂石」に似た印象を受けた。いずれにしても磐田原台地の西方から搬入した可能性が高く、瀬戸内系石器群に含めて良いであろう。

6は頁岩製の横長剥片石核で、片側全面に自然面を残す剥片を素材にして、山形に整えた打面から横長剥片を剥離している。これは底面に素材剥片の剥離面を残している点と打面を山形に整えている点で、瀬戸内概念に合う石核である。

上記の石器以外にも縦長剥片を使った石器や縦長剥片、縦長剥片石核が多く出土していることから、縦長剥片系石器群もまとまって出土していることがわかる。また、尖頭器や両面加工石器といった石器も出土している。両面加工石器は磐田原台地では特異な存在である。

このように、このブロックには複数時期の石器が混在していることが明らかである。報告書では、「調査範囲が狭く、しかも調査者が石器に関してあまりにも浅学であることから」と記して、このブロックを細分することを避け、石器の分布と出土した石器を示すにとどめているが、これはむしろ賢明なことで、広野遺跡におけるブロックの状況は、地層の堆積状況の良くない磐田原台地でのブロックのあり方を象徴している。それは、寺谷遺跡のように縦長剥片系石器群のみから形成されているブロックがある一方で、このブロックのように、単一ブロックの一括資料に見えても、時期の異なる石器が混在しているブロックが存在することで、そこでは、同一地点に時期の異なるブロックが重複して形成されている可能性が考えられる。同一地点に時期の異なるブロックが形成される要因は後に検討するが、広野遺跡での石器の出土状況は、先に検討した勾坂中遺跡のエリアS4で見られた、ブロック間の同時性の矛盾とともに、磐田原台地でのブロックのあり方を象徴する存在である。このような石器の出土状況を見ると、一ブロック＝一時期と言う考えを改め、資料単位の抽出方法を考え直す必要を実感させられる。

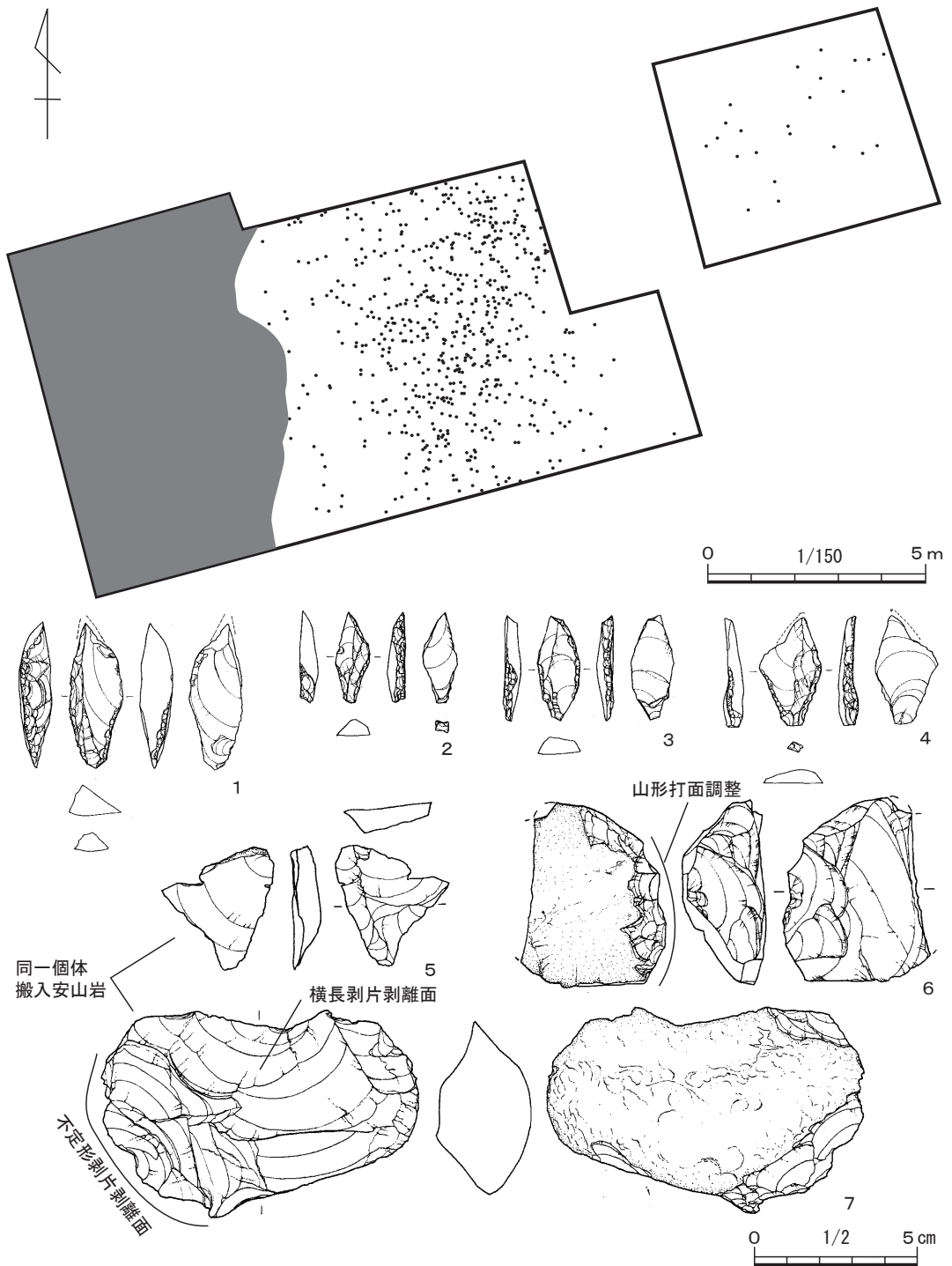


図7 広野遺跡の石器出土状況と出土石器

(6) 長者屋敷北遺跡

この遺跡では、図8に示すように濃密なブロックを検出している。ブロック S04 が最大のブロックで、これに隣接して複数のブロックが検出されており、ブロック S01 がやや離れて検出されている。ブロック間では多くの接合関係が見られる。従来の解釈なら、これらのブロックは同時期と言うことになる。

ブロック S01 では、図8-1の角錐状石器が報告されている。これは縦長剥片の縁辺全周を、刃潰しをするように加工している。先端部がないが、実測図の末端は欠損していることから、末端側が先端になる可能性がある。そうすると、この実測図は上下が逆になるかもしれない。2も角錐状石器と報告されている。縦長剥片を使い、右側縁の加工は剥片の幅を半分程度に縮める程に加工している。先端をわずかに欠損しているため、先端の加工は不明だが、残っている縁辺はすべて加工されている。右側縁の加工は刃潰し加工で、左側縁下半分の加工は、刃潰し状であるのに対して、上半分は角度の低い剥離が入り、スクレイパーの刃部のようにになっている。剥離面の切り合いから、左側縁の加工は、下半分の刃潰し加工が先で、上半分の角度の低い加工が後に行われている。このことから、角錐状石器と言うよりも、当初は、二側縁加工のナイフ形石器であったが、後に刃部を加工して別器種に転用した石器と考えた方が良い。

同じブロックでは、3、4に示した縦長剥片を使ったナイフ形石器が出土しているように、縦長剥片系石器群も出土している。

この遺跡最大のブロックのブロック 04 からは、5～7に示した縦長剥片を使ったナイフ形石器と共に8の横長剥片石核が出土している。この石核は円礫を使い、打面がわずかに山形になるようにしてから横長剥片を剥離している。板状の剥片を使っていないため、瀬戸内概念からは外れるが、打面をわずかながら山形にして横長剥片を剥離していることから、瀬戸内系石器群に含めて良いであろう。いずれにしても5～7からうかがえる縦長剥片剥離技術を主体とする石器群とは相容れない存在である。

ブロック外では9の石核が出土している。縦長剥片を素材にした横長剥片石核で、珍しい資料である。

長者屋敷北遺跡では、ブロック S01～S04 が検出されており、図示したようにブロック S01 と S02、S02 と S03、S04 の間で多くの接合関係が見られる。S02 と S03 は縦長剥片剥離技術を主体とする石器群で、同一ブロックの資料を同時期と考え、接合関係のあるブロック同士も同時期と考えると、図3-1、2、8といった瀬戸内系石器群とその他の縦長剥片系石器群が同時期になる。

これまで検討してきたブロックと同様に、ここでも武蔵野ローム層のV層～IV層下部で出土する石器群とVI層もしくはIV層下部～中部で出土する石器群が同時期と言う解釈になる。その原因は、やはり、同一ブロックの石器群を同時期と考えたことと、接合関係のあるブロック同士を同時期と考えたことにある。ここは同一ブロックでも、時期の異なる石器群の混在、同一地点でのブロックの重複形成を考えなければならない。

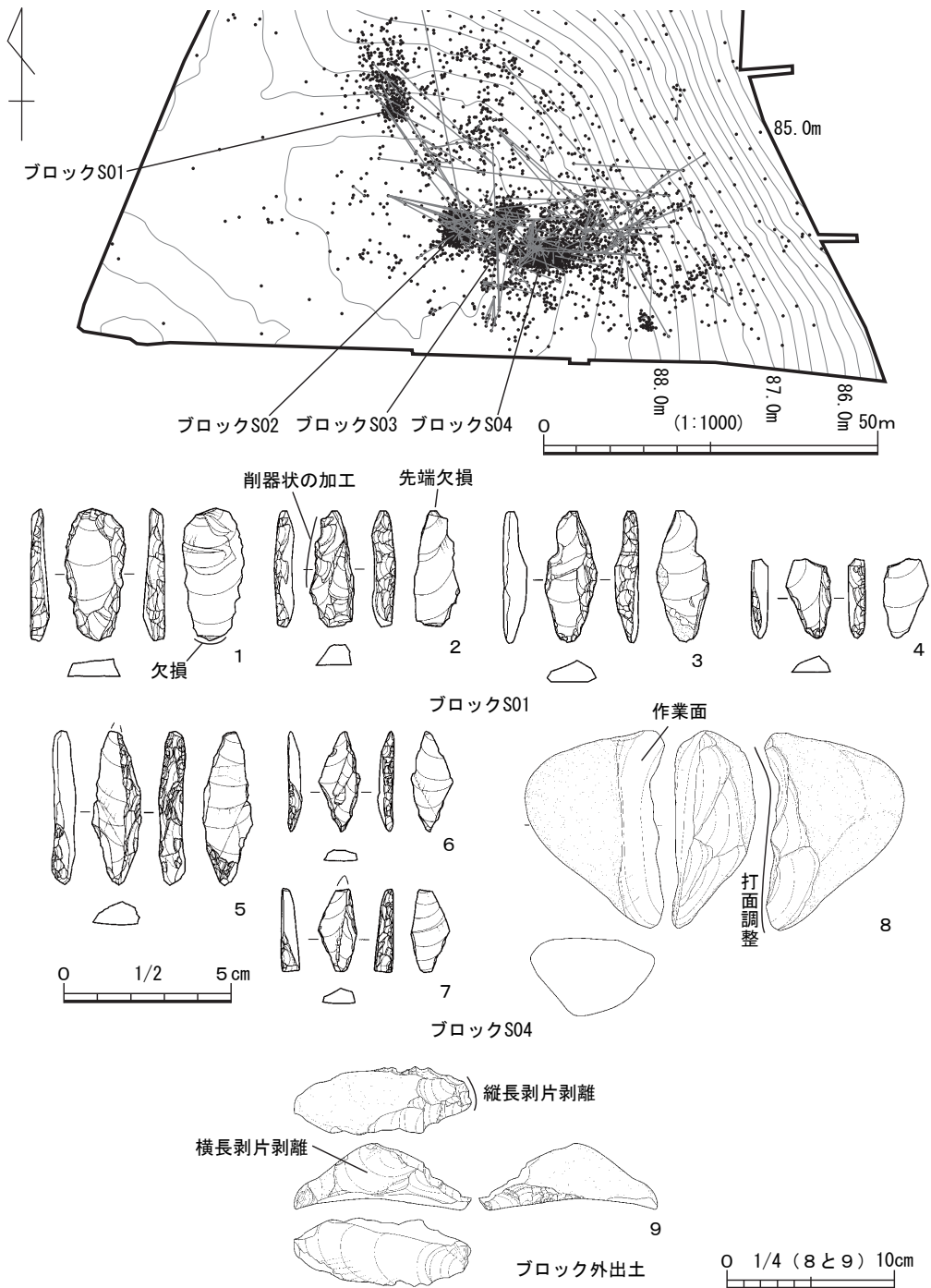


図8 長者屋敷北遺跡の石器出土状況と出土石器

4. 瀬戸内系石器群と縦長剥片系石器群の関係

これまでの検討で、下記のことを指摘できる。

- ・瀬戸内系石器群のみで構成されるブロックは存在しない。
- ・瀬戸内系石器群が出土するブロックには縦長剥片系石器群が伴う。

このような石器群に対して、これまでは下記のように理解されてきた。

広野北遺跡のナイフ形石器文化（K3）が、ナイフ形石器文化（K2）の下に間層をはさんで出土したとの記載と、ATを検出したレベル付近で出土したとの記載から、ナイフ形石器文化（K3）を武蔵野ローム層のVI層段階に位置付け、今回検討した石器群をその次の時期に位置付けている。そして、ナイフ形石器文化（K3）で成立した縦長剥片系石器群を引き継ぎながら、瀬戸内系石器群が新たに加わるようになる（高尾 2006；進藤 1996；須藤 1996）。

上記のポイントは二つある。一つ目は広野北遺跡のナイフ形石器文化（K3）を瀬戸内系石器群以前に位置付けていること。二つ目は、瀬戸内系石器群と縦長剥片系石器群が同一層から出土している事実を共存と認めていることである。

一つ目の広野北遺跡ナイフ形石器文化（K3）について、報告書を読み解くと次の事実が浮上する。

ナイフ形石器は 32 点報告されており、これらのうち 7 点は個体分類されている。さらに個体分類された 7 点中 3 点は、他の複数の石器と個体を共有していることから、ナイフ形石器文化（K3）の中で製作された可能性がある。しかし、他の 29 点は個体認識されていないか、構成個体が少ないことから、ナイフ形石器文化（K3）の中で製作された可能性はないか、極めて低い。しかし、磐田原台地では武蔵野ローム層第VI層段階の可能性のある石器群は、広野北遺跡ナイフ形石器文化（K3）しかない。すると上記 29 点のナイフ形石器の製作地は、磐田原台地内には存在しないことになる。

これを裏付けるように、ナイフ形石器は確かに縦長剥片を使っており、他にも縦長剥片が出土しているが、接合資料と剥片剥離技術を見る限り、縦長剥片剥離技術は非常に乏しい。接合資料の記載では、「明瞭に識別し得る（縦長剥片剥離技術に分類される）A1・A4類の卓越と言う特徴を把握することができた。」（括弧は筆者補充）と書かれている一方で、石核の記載では「整った縦長剥片を取った痕跡を残す石核は乏しいことが明瞭である。」と書かれている。この点で報告書の記載が矛盾しているが、剥片剥離技術の実態は後者であり、縦長剥片剥離技術は明瞭ではない。

上記の事実から、広野北遺跡ナイフ形石器文化（K3）では、縦長剥片系石器群が存在するものの、肝心の縦長剥片の製作が明瞭ではなく、他に同期の石器群が存在しない現状では、広野北遺跡ナイフ形石器文化（K3）は単独では一時期を形成し得ないことになる。

さらに、ここでは図9に一例だけ示しておくが、ナイフ形石器文化（K2）で報告された礫群 37 とナイフ形石器文化（K3）で報告された礫群は、出土状況図を合成すると、両礫群にはほとんどレベル差がない。ここまで考えると、ナイフ形石器文化（K2）とナイフ形石器文化（K3）の分離は再

検討が必要となるが、これを追及すると本稿の主旨から外れていくため、別稿に譲る。

さて、広野北遺跡ナイフ形石器文化（K3）の存在に疑問が生じたとすると、磐田原台地でもっとも古い石器群は、台形様石器が単独で出土した道東遺跡（磐田市教育委員会 1992）を除くと、瀬戸内系石器群になる。瀬戸内系石器群が盛行する時期は、全国的視野で見ると各地で地域性が成立する時期とされている（佐藤 1992）。そう考えると、磐田原台地での石器群とその地域性の成立は、瀬戸内系石器群の流入によって始まったと理解できる。

この考えが正しいなら、瀬戸内系石器群と縦長剥片系石器群が同じブロックで出土すると言うことは、これらを残した集団が、同時に二つの石器群を残したのか。

ここで二つ目の問題、瀬戸内系石器群と縦長剥片系石器群が共伴するかどうかを検討する。これまで磐田原台地で両者の共伴を認めてきた背景には、静岡県東部や南関東で両者の共伴が報告されている事例がある。しかし両地域では、瀬戸内系石器群が流入する以前に発達した縦長剥片系石器群が確立しており、そこに角錐状石器や国府型ナイフ形石器といった瀬戸内系石器群が断片的に混入しているのが実態である（森先 2010）。

広野北遺跡ナイフ形石器文化（K3）の存在に疑問が生じている以上、静岡県東部や南関東のように、縦長剥片系石器群が確固たる存在だった地域に瀬戸内系石器群が流入し、両者が共存したと言う理解はできない。また、数多く存在する不定形剥片剥離技術を主体とする石器群が、瀬戸内系石

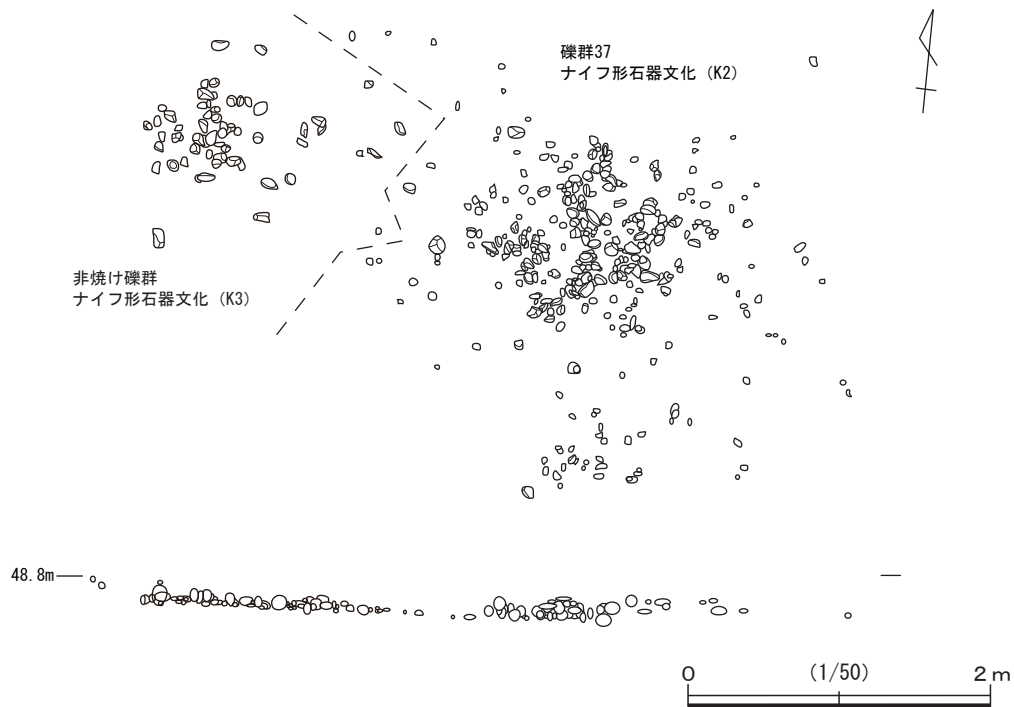


図9 広野北遺跡の礫群37と非焼け礫群出土状況

器群、ナイフ形石器文化 (K2)、同 (K3)、どの石器群に伴うのか、理解が困難になる。

さらに問題を発展させると、不定形剥片を使用した石器を便宜的な石器とするなら、単独でブロック間を移動する国府型に似たナイフ形石器や翼状剥片石核、縦長剥片とその石核は管理的な石器と考えられるが、翼状剥片石核と縦長剥片石核と言う、技術的にまったく異なる石器が管理石器として共存し得るのか、旧石器時代の集団がいかに様々な技術を保有して、状況に応じて技術を使い分ける技術組織 (Binford 1977, 1978, 1979) を持っていたとしても、瀬戸内系の横長剥片剥離技術と縦長剥片剥離技術の両方を同時に保有して使い分けていたのか、あるいは、磐田原台地内で瀬戸内系石器群を持った集団と縦長剥片系石器群を持った集団が共存したのか、疑問は尽きない。

ここで問題の根本に戻ると、瀬戸内系石器群と縦長剥片系石器群の共伴と認めるなら、先に勾坂中遺跡のエリア S4 で指摘したように、角錐状石器と、「石刃技法」と呼ばれた技術や「茂呂型ナイフ形石器」と呼ばれてきた石器を含む石器群を同時期と認めることになるが、これは武蔵野ローム層 V 層～IV 層下部の石器群と、VI 層もしくは IV 層中部～上部の石器群を同時期と認めることでもある。そうすると、磐田原台地の細石器出現以前の石器群は時期区分できなくなり、石器群の変遷を説明できなくなるどころか、石器群は変遷しなかったことになる。

その原因は、瀬戸内系石器群と縦長剥片系石器群を、同一ブロックからの出土を根拠に同時期と考えたところにある。やはり、瀬戸内系石器群と縦長剥片系石器群は別時期と考え、同一ブロックからの出土とはいえ、時期の異なる石器群の混在、さらには時期の異なるブロックが同一地点で重複して形成されたと考える方が合理的である。先に指摘したように、ブロック外では明らかに時期の異なる石器が同一平面で出土しているのに、ブロックは同一時期の石器群から構成されるという考えは矛盾している。ブロック内でもブロック外と同様に時期の異なる石器群が混在している状況を想定しなければならない。地層の堆積状況が良くない地域では当然のことである。地層の堆積状況が良くなければ、石器は相当な長期間地表に露出していたと考えられる。あるいは、埋まったとしても、再び地表の露出する機会があったことは容易に想定できる。

ここで、地表に露出した古いブロックを発見した集団がとる行動は二つ想定できる。無視するか再利用するかである。磐田原台地の例ではないが、筆者は、静岡県駿東郡長泉町にある「向田 A 遺跡」の報告で、下記の事例を報告している (静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007)。

「Ja (Gn) 04」と個体分類した石材は、緑色の良質な玉髄で非常に目立つため、個体別分類の容易な石材である。この石材は、愛鷹ローム層の第Ⅲスコリア帯で検出したブロック 14～16 で 128 点出土しており、分布の主体が第Ⅲスコリア帯にあることは間違いないが、同一個体の石器が、2 枚の間層をはさんだ上にある第Ⅰ黒色帯とニセローム層で検出したブロック 12 で 5 点出土している。そして、それらのうち 1 点は、下位のブロック 15 の石器 3 点と接合している。ブロック 12 とブロック 14～16 は、出土遺物の極めて少ない 2 枚の間層をはさむことから、両ブロックを同一文化層にはできない。しかし、別の文化層とは言え、両文化層では同一個体の石材を複数共有している上に接合例が確かにある。当然ながら、これが事実であることは念入りに確認した。

この事実からは、ブロック 12 の形成時に、それ以前に形成されたブロック 14 ～ 16 に含まれていた石材が、時期を越えて再利用されたことを想定できる。これは地層堆積状況の良い愛鷹山麓での事例で、2 枚の間層をはさんだ下にあるブロックの石材が、どのようにして後の時期に再利用されるようになったのかと言う疑問は残るが、文化層間で同一個体の石材と接合資料が存在することは事実である。層位的条件の良くない磐田原台地で同様の事態を想定するなら、瀬戸内系石器群のブロックを、後の時期に縦長剥片系石器群を持った集団が再利用したことを想定できる。これは突飛な考えではなく、瀬戸内系石器群のブロックが地表に露出していたとしたら、後の時期に別の集団がそれを再利用しないと考える方が非現実的である (Binford1984、田村 2006)。

ブロックや石器が時期を超えて再利用されたことを示すには、再加工された石器の実例を示す必要がある。その可能性を積極的に示す資料の検索は今後の課題の一つで、筆者が実見したところでは、断片的ながら一次剥離面と二次剥離面で風化の度合いが異なる石器を見出しはいるが、時代を超えた再利用、たとえば旧石器時代の石器を縄文時代に再利用した可能性も考えなければならぬ。また、風化の違いが旧石器時代での時期の違いを表しているのかも証明が必要である。翼状剥片が尖頭器に加工されているような事例があれば良いが、あったとしても稀な例であろう。したがって、旧石器時代における石器の再利用を証明するには、相当な困難が予想される。

しかし、地層の堆積状況の良くない磐田原台地で、多くのブロックが重複もせず、再利用もされず、時期ごとに分かれているといった状況は、石器群を整理的に理解するためには便利な想定だが、そのような状況は、一度形成されたブロックが短時間のうちに埋没しない限りは想定困難なことで、地層の堆積が遅い地域では、むしろ、ブロックが同一地点で再利用されたり、重複して形成されたりする可能性の方を想定すべきある。そして、その背景は、下記のように説明できるであろう。

瀬戸内系石器群のブロックが形成された後、地層堆積の遅い磐田原台地では、相当な期間ブロックが地表に露出していたか、埋没したとしても静岡県東部の愛鷹山麓や南関東のように深く埋没することがないため、再び地表に洗い出されることがあったと思われる。そのような古いブロックが地表に露出していた場合、後にそれを発見した集団にとっては石材産地に代わって利用できる二次石材産地になったと考えられる。あるいは、二次石材産地として利用されない場合でも石器製作場所を選択する契機になったことも想定できる。同一地点が繰り返し利用される例は実例をあげるまでもなく、通常見られることで、石器製作場所の選択理由には地形的、地理的条件の他に、再利用できる石器が散在していることも当然含まれて良い。むしろ、散在する石器を再利用せずに新たな石材を確保する方が、リスク低減戦略 (Wiessner1982、1983) の観点から無理がある。利用可能な資源の scavenge といった行為 (Binford1979、1984) は当たり前に想定されて良い。

したがって、瀬戸内系石器群と縦長剥片系石器群が同一ブロックで出土していることは、瀬戸内系石器群のブロックと縦長剥片系石器群のブロックが、時期を違えて同一地点で重複して形成されたと考えられる。そして、そのように考えなければ、他地域との編年や段階の整合を図れない。

5. まとめと今後の課題

今回は、静岡県磐田原台地における旧石器時代遺跡で、瀬戸内系石器群が出土しているブロックを対象に、石器群の出土状況を検討し、瀬戸内系石器群のみから構成されるブロックは存在せず、必ず縦長剥片系石器群と一緒に出土していることを確認した。そして、周辺ブロックとの接合関係や個体共有状況などから、同一ブロック＝同時期と言う前提では、ブロック間の時期的関係に矛盾が生じることを指摘した。このことから、同一ブロックから出土した石器群が、異なる時期の石器群から構成されている可能性を想定し、改めて瀬戸内系石器群が出土したブロックを検討し、瀬戸内系石器群のブロックが形成された後に、同一場所に縦長剥片系石器群のブロックが重複して形成された可能性が高いことを指摘した。その例証として、同一石器に相当な時間をもって工程の異なる加工が行われた可能性のある資料を示した。そして、これは、時期を越えた石器の再利用、あるいは利用可能な資源の scavenge と言った行為が行われた可能性を示すものと考えた。

今回の検討には重要な前提がある。広野北遺跡のナイフ形石器文化(K2)とナイフ形石器文化(K3)の分離である。今回は、ナイフ形石器文化(K3)の存在について疑義を提唱したが、これはナイフ形石器文化(K3)の一部を検討した結果にすぎない。報告通りナイフ形石器文化(K3)が成立するとしたら、ブロック重複形成の順番や、石器の再利用、scavenge と言った行為の痕跡に対する理解も再検討しなければならない。

しかし、今回の検討は、これまで筆者も依拠してきたエリアと言う概念に再検討を迫るもので、磐田原台地における石器群の分析単位を再構成する必要が出てきた。エリアの再検討は、当地における旧石器時代研究の根本を揺るがす問題である。

謝辞

最後になりましたが、この拙稿を書くにあたりまして、佐藤宏之先生には多くの御教示と御指導をいただきました。また、資料見学に際しては磐田市教育委員会に御配慮をいただきました。厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 池谷信之・富樫孝志・麻柄一志 2010 「六 東海・北陸地方」『日本の考古学講座 1：旧石器時代 上』, 473-504 青木書店
- 磐田市教育委員会 1992 『道東古墳群発掘調査報告書』
- 磐田市教育委員会 1994 『勾坂中遺跡群発掘調査報告書』
- 磐田市教育委員会 1996 『勾坂中遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 磐田市教育委員会 1997 『勾坂上2遺跡発掘調査報告書』
- 磐田市教育委員会 2009 『埋蔵文化財発掘調査報告書―長者屋敷北遺跡・東浦遺跡―』
- 佐藤宏之 1992 『日本旧石器文化の構造と進化』 柏書房
- 静岡県埋蔵文化財調査研究 1998 『高見丘Ⅲ・Ⅳ遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第108集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究 2007 『向田A遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第178集
- 進藤貴和子 1996 「磐田原台地の石器群編年をめぐる」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年』 静岡県考古学会シンポジウム実行委員会:51-52
- 須藤隆司 1996 「中部・東海・北陸におけるV・IV下段階の石器群：列島内対比の視点から」『石器文化研究』5:451-464
- 高尾好之 2006 「東海地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年的研究』 同成社, 61-102
- 高橋章司 2001 「第6章 翠鳥園遺跡の技術と構造」『翠鳥園遺跡発掘調査報告書』 羽曳野市教育委員会:192-221
- 田村隆 2006 「関東地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年的研究』 同成社, 7-60
- 富樫孝志 2008 「向田A遺跡におけるブロック間工程連鎖」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』14:11-26
- 豊田町教育委員会 1996 『広野遺跡』
- 野口淳 1995 「武蔵野台地IV下・V層段階の遺跡群：石器製作の工程配置と連鎖の体系」『旧石器考古学』51:19-36
- 日本旧石器学会 2010 『日本列島の旧石器時代遺跡：日本旧石器（先土器・岩宿）時代遺跡のデータベース』
- 平安博物館 1980 『寺谷遺跡発掘調査報告書』
- 平安博物館 1985 『広野北遺跡発掘調査報告書』
- 森先一貴 2010 『旧石器社会の構造的変化と地域適応』 六一書房
- 山崎克巳・進藤貴和子 1993 「第一章 旧石器の宝庫・磐田原台地」『磐田市史 通史編上巻』51-109
- Binford, L. R. 1977 Forty-seven trips: A case study in the character of archaeological formation process. In R. V. S. Right(ed.), *Stone tools as cultural makers: Change, evolution, and complexity*, pp.24-37, Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
- Binford, L. R. 1978 Dimensional analysis of behavior and site structure: Learning from an Eskimo hunting stand, *American Antiquity* 43:330-361.
- Binford, L. R. 1979 Organization and formation process: Looking at curated technology. *Journal of Anthropological Research* 35:255-273.
- Wiessner, P. 1982 Beyond willow smoke and dog's tails: A comment on Binford's analysis of hunter-gatherer settlement systems. *American Antiquity* 47:171-178.
- Wissner, P. 1983 Style and social information in Kalahari San projectile points. *American Antiquity* 48:253-276.

図の出展

- 図 1 磐田市教育委員会 1994 をもとに筆者が作成
- 図 2 すべて磐田市教育委員会 1994
- 図 3 すべて磐田市教育委員会 1994
- 図 4 遺物出土状況図は磐田市教育委員会 1996 をもとに筆者が作成 遺物の実測図はすべて磐田市教育委員会 1996
- 図 5 すべて磐田市教育委員会 1994
- 図 6 遺物出土状況図は平安博物館 1985 をもとに筆者が作成 遺物の実測図はすべて平安博物館 1985
- 図 7 遺物出土状況図は豊田町教育委員会 1996 をもとに筆者が作成 遺物の実測図はすべて豊田町教育委員会 1996
- 図 8 遺物出土状況図は磐田市教育委員会 2009 をもとに筆者が作成 遺物の実測図はすべて磐田市教育委員会 2009
- 図 9 平安博物館 1985 をもとに筆者が作成

The Overlap Formations of Stone Tool Blocks at the Paleolithic Sites in Iwatabara Plateau, Shizuoka.

TOGASHI Takashi

We have been understanding the Paleolithic sites at Iwatabara plateau in Shizuoka prefecture by the concept of “Area” that represents the range of distribution of the same period remains. The concept of “Area” assumes that one stone tool block is constituted by the stone tools in same period. But the author discovered some contradictions between stone tool blocks which are supposed in same period under the concept of “Area”. Then the author assumed that one stone tool block is constituted by the stone tools in different periods, and examined the relationships of stone tool groups made by blade flake and “Setouchi stone tool groups” within same blocks. Consequently it is rather rational that the stone tool block including both stone tool groups made by blade flake and “Setouchi stone tool groups” were not formed in same period but were formed by the overlap at same location with different periods. We must rethink the concept of “Area” that one “Area” is not constituted by the same period remains but is overlapped by the different period remains.